

第六三四海軍航空隊玄界基地の遺品

古川秀幸（伊都国歴史博物館）

I はじめに

戦後65年を経過した今日、日本最大の秘匿基地と言われた「海軍航空隊玄界基地」の遺構が糸島の地に人知れず生き続けていることを御存知の方はほとんどいない。

糸島市志摩久家にはたくさんの兵士の食事を作った烹炊場（ほうすいじょう）のカマド跡や食糧貯蔵庫が草むらにひっそりとたたずみ、同二丈松末の海岸には水上機を陸揚げするためのレールが波打ち際にさらされ続けている。こうした遺構は、まさに歴史の「生き証人」であり、戦争を知らない世代に語り継がなければいけない大切な文化遺産と言える。

平成22年7月、志摩歴史資料館において夏季企画展「大戦の記憶」—海軍航空隊玄界基地展—を開催し、同基地関連の遺品を展示公開した。

同展示会では中田健吉氏をはじめ地元の方々からの聞き取りなどで基地の概要をつかみ、広く紹介したが、新たに発見された遺品も多く、本稿を借りて紹介してみたい。

II. 第六三四海軍航空隊 玄界基地

1) 大戦下の情勢

昭和十六年（1941）、ハワイの真珠湾攻撃により始まった太平洋戦争は、直後の南方戦線の快進撃により戦線を拡大していく。しかしながら、十七年六月のミッドウェー海戦での敗北を機に戦局は悪化、一八年二月、ガダルカナル島での敗戦によって日本軍は制空権、制海権をほぼ喪失し、一気に敗戦色が濃くなっていった時期を向かえた。

こうした状況下、昭和19年5月、岩国基地において水上爆撃機「瑞雲」（写真1）を主体とする第六三四海軍航空隊が編成され、フィリピン・レイテ島などの激戦地へと出撃していくことになる。

二十年春、ガダルカナル島での敗戦以降、大戦は激化していき、出撃地のあった鹿児島県・

指宿基地を米軍からの攻撃を回避するため、基地施設（水上機基地）の移設が計画されることになる。

水上機基地の立地条件としては、①十分な面積があり、将来拡張できる。②恒風方向に高地や山がない。③気象条件がよい。④付近に発見される目標がない。などの細かい基準が『城施設教範』に規定されており、年間を通して静かな波で、水上飛行機を陸揚げできる海岸線を有する糸島半島がその一つに選ばれ、船越湾、引津湾周辺に秘匿基地として開設されることとなる。

その後、大戦は激化していき、本土決戦を前にフィリピン島戦時に三〇一飛行隊が、また、沖縄戦前に三〇二飛行隊が第六三四海軍航空隊の指揮下に置かれ、傘下に入ると共に各地の水上飛行機が糸島に集められ、我が国最大と言われる秘匿基地へと変貌していく。

2) 玄界基地の概要

玄界基地は、糸島半島西部、船越湾と引津湾とに挟まれた岬頸部、志摩久家から船越にかけての集落に本隊を置き、対岸にあたる二丈松末地区の竈門ノ浜にも基地機能が開設されている。

ここでは、終戦後、福岡県が作成し、GHQに提出した「玄界基地」資料（図2～3）と中田氏が作成した玄海基地位置図（図4）を元に基地の概要を記したい。

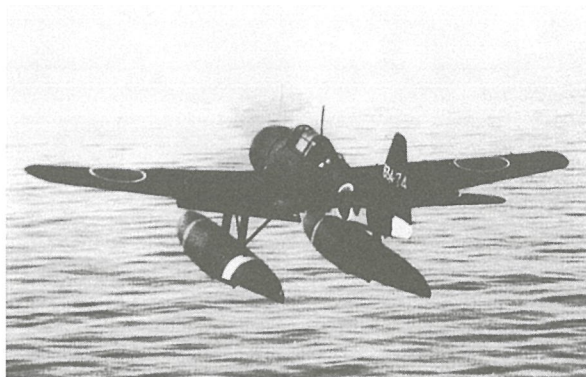


写真1 瑞雲

3) 地形など

本部など主要施設が置かれた久家・船越地区は砂嘴でできた陸繋砂州の地形を呈し、東西130m、南北幅70～80mを測る。この狭小な地に集落と同居する形に本部、通信施設、医療機関など主要施設が配置されているが、兵士の宿舎としては民家やお寺、小学校などが使われており、きびしい中にも住民や宿舎の家族と若い兵士たちとの交流があったと言われる。また、今でも音信を交えられている方々がおられるが、その方々の記憶こそが当時の基地の概要や規模を復元できる唯一の方法となっているものである。

(写真2)



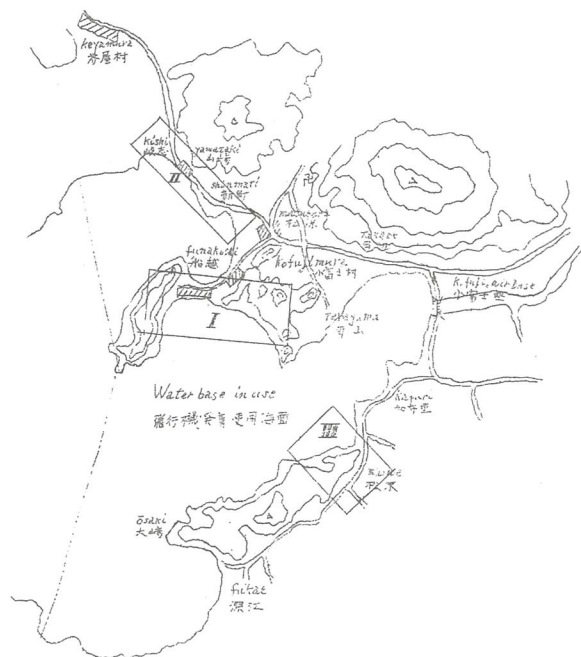
写真2 下宿先の隊員



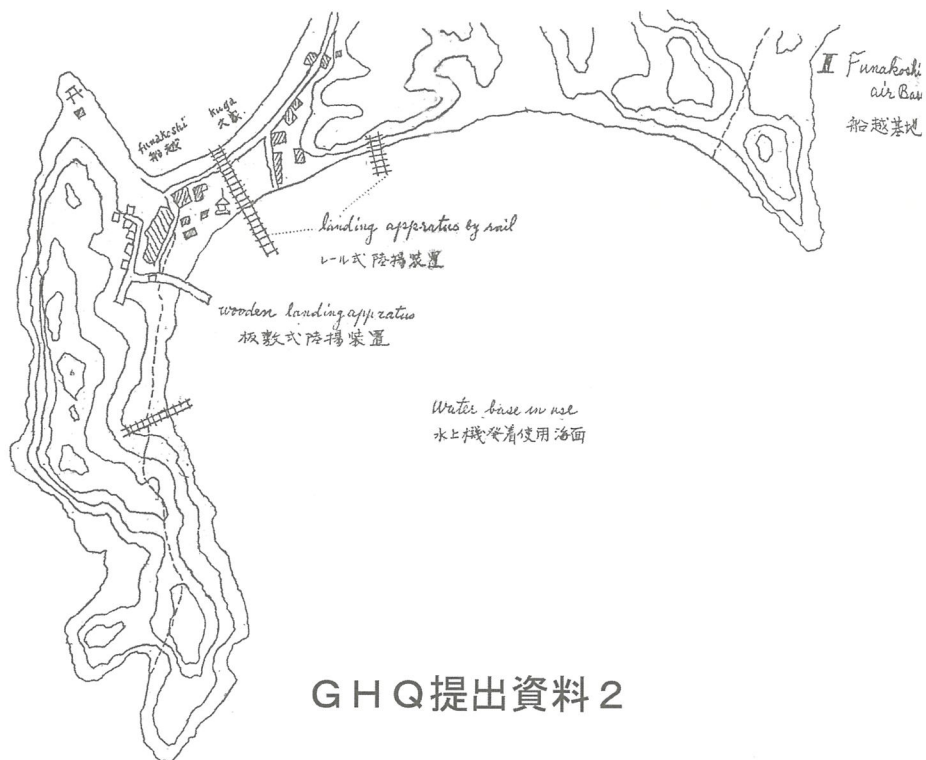
第1図 糸島地区の軍事基地

※玄界基地は第六三四海軍航空隊
元岡飛行場は福岡飛行訓練所
牡丹江は民間のジャンク船造船会社

Complete chart of Genkai air Base
玄界水上基地全圖

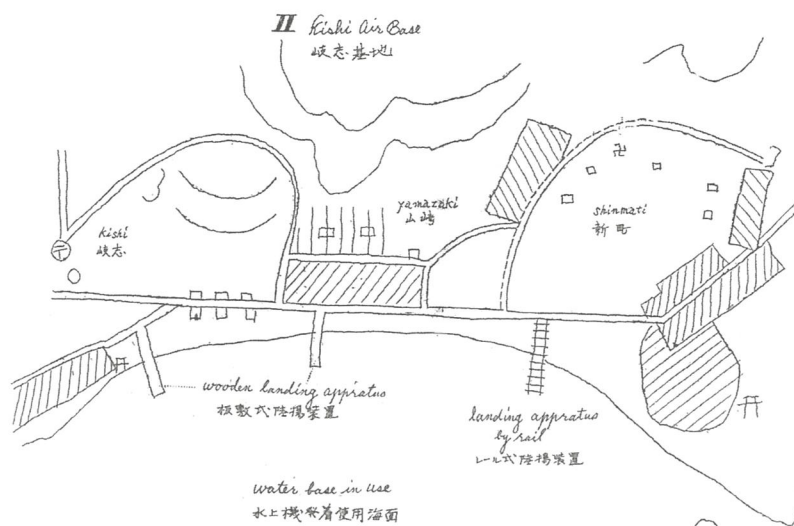


GHQ提出資料 1

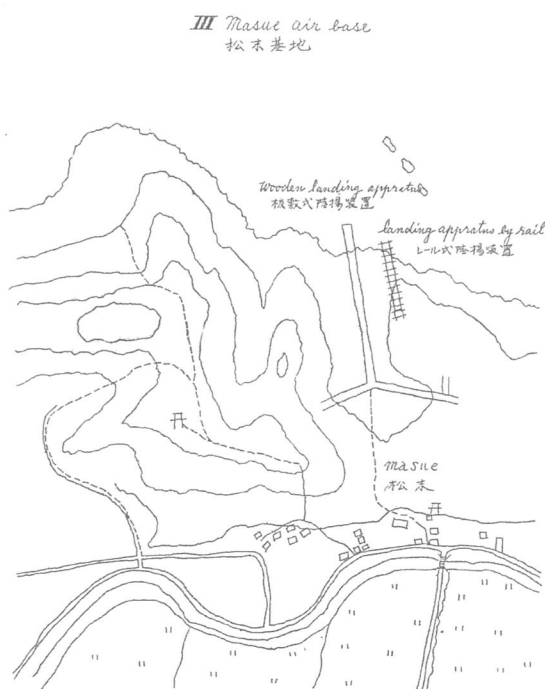


GHQ提出資料 2

第2図



GHQ提出資料3



GHQ提出資料4

第3図

本項では、中田氏が聞き取りによって作成された資料第4図を元に、現状で判明している施設の概要を記したい。

4) 主要施設

本部は船越地区の民間病院・溝越医院内に設置、同仲西倉助氏宅が指令宿舎となっていた。また、通信機関関係では、仲西 操氏宅が通信所として使われていたという。水上機の格納施設としては、法生寺西側に格納庫、東側にレール式陸揚装置1基、浄徳寺南側の海岸線にレール式陸揚装置1基、赤石山の南側海岸線に板敷式陸揚装置1基が設置されている。また、対岸の二丈松末側にも格納庫とレール式陸揚装置1基が存在している。基地に集められた水上機の整備施設としては、発動機整備場が生松天神社境内に置かれていたことが判っている。

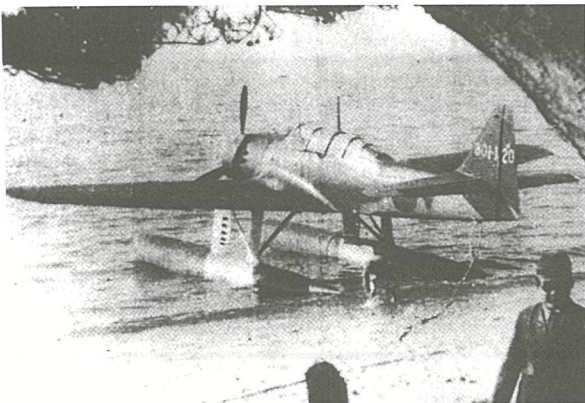


写真3 浄徳寺海岸の瑞雲



写真4 兵器部隊（綿積神社にて）

聞き取りにより、千人以上とみられる搭乗員宿舎については、当初はやまや旅館に50名程が寄宿されていたが、寺、小学校も充てられており、5名～7名名程の単位で民家にも寄宿されていたと言う。

この他、防衛施設として赤石山、ヨミノ辻、オカネ山、浄徳寺などの高所地に高射機関砲や機銃施設が設置されていたようである。

参考資料ではあるが、平成11年度に志摩久家地区の文化財試掘調査（旧志摩町教育委員会実施）において2基の機銃銃座が発掘されており、次項でその概要も報告したい。

Ⅲ 遺構

現在、確実に玄海基地の遺構として確認されているものは、志摩久家地区と二丈松末地区のみである。しかしながら、踏査など正式な調査が行われていないため、今後、新たに遺構が発見される可能性は高い。今後、資料の追加を待って、随時、加筆・修正をしていきたいが、本来ならば、遺構そのものの保存措置が急務となるものと言える。

本書では「玄界基地」という大きなエリアではなく、GHQ提出資料に見られる「船越基地」、「松末基地」という分類で報告をしている。

1) 船越基地

烹炊場（図版1）

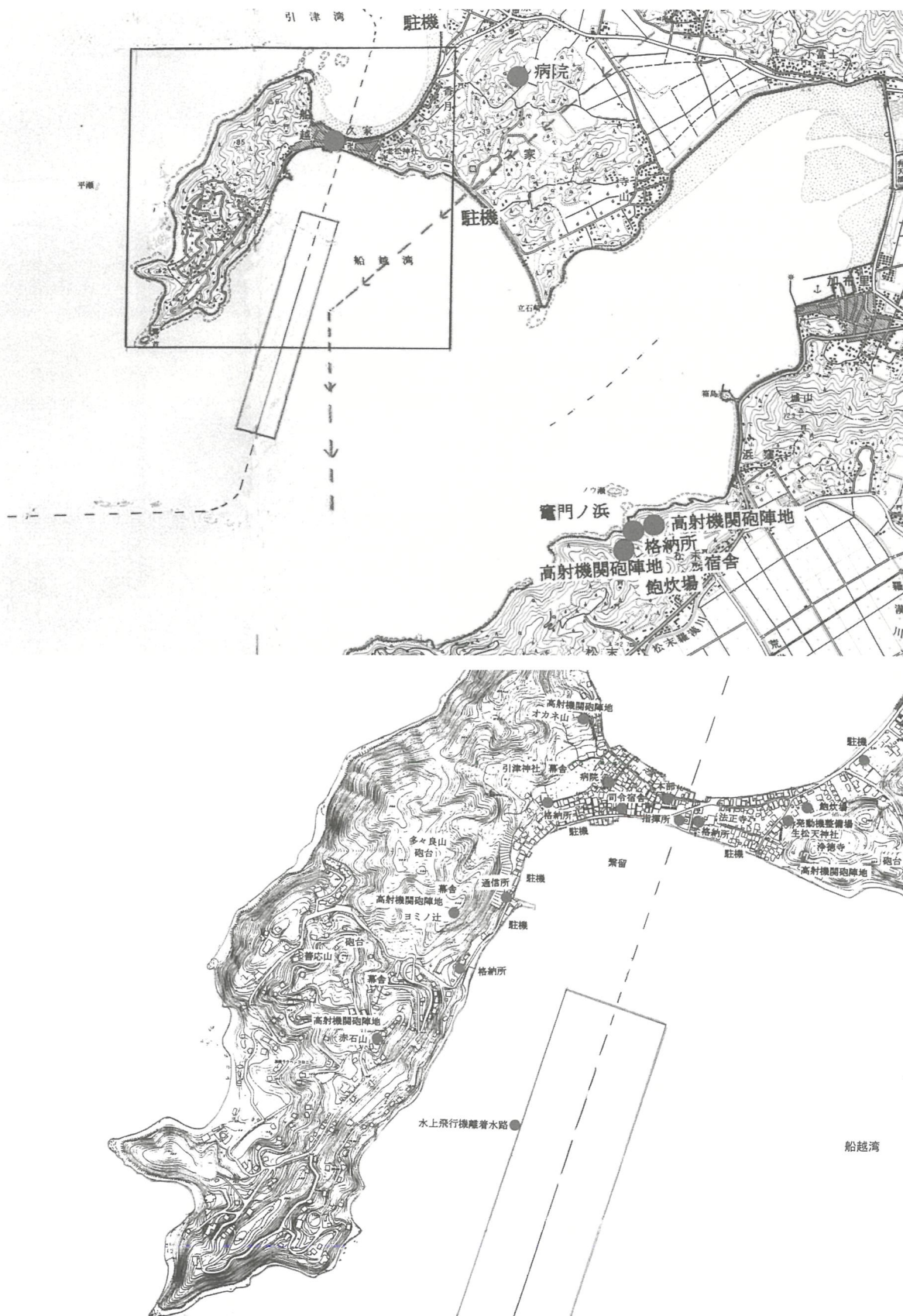
糸島市志摩久家に所在する。丘陵裾部に平行して作られており、長さ14m、幅100cm、高さ70cmを測る。現在、煉瓦製の竈14基が残っている。

竈は東西方向に連続して作られているが、本来は20基程あったものと考えられる。また、地権者の松尾治部氏の記憶によると簡単な作りの覆いがかかっていたという。

竈1基当たりの規格は、焚口が75cm×30cm、深さ40cmを測るもので、14mの間に連続して14基が築かれ、竈奥に6個の煙出し孔が175cmおきに確認できる。

食糧貯蔵庫（図版1）

烹炊場の西に設置されており、丘陵裾部に壕を掘り抜き、コークス煉瓦を積み上げて造られ、コンクリートで補強されている。縦2m×横2m、奥行2mを測る。



第4図 第634海軍航空隊玄界基地復元図 (中田健吉氏作成)

2) 参考資料

ここでは、玄界基地内ではないものの、近隣の軍事施設であり、玄界基地との関連が高いものを紹介しておきたい。

機銃施設 (第5図・写真5・6・7)

志摩久家字切嶽1334番地で発掘された機銃施設である。遺構はバーナル化粧品保養施設建設の事前調査として志摩町教育委員会によって発掘されたもので、切嶽丘陵の頂上部 (標高58.26m) より2基の機銃施設が検出されている。

最頂部で確認された1号遺構は、5.2m×5.9mを測り、形状は楕円形を呈する。地山成形により造られており、外周はトーチカ状に石を積み上げ、東側に50cm幅の入り口が設けられていた。銃座は中央部で検出され、80cm×80cmを測るコンクリート製。「+状」の固定台が設置されている。

1号遺構の北側、やや低い位置で検出された2号遺構は、ほぼ正円形を呈し、直径で4.5mを測る。外周はトーチカ状に石を積み上げ、東側に100cm幅の入り口が設けられていた。銃座は中央部で検出され、80cm×80cmを測るコンクリート製。「+状」の固定台が設置されている。本遺構は玄界基地の範囲内ではなく、久家から寺山海岸に置かれていた「小倉陸軍兵器補給廠」内に設置されていたものである。また、中田氏の聞き取りによると地元の方が守衛として勤務されていたと言い、機銃を抱えて山を上り下りしていたとされる。

玄界基地内の赤石山などに設置された機銃施設もこれと同規模であった可能性は高い。

＜調査終了後、消滅＞



写真5 調査前



写真6 1号遺構



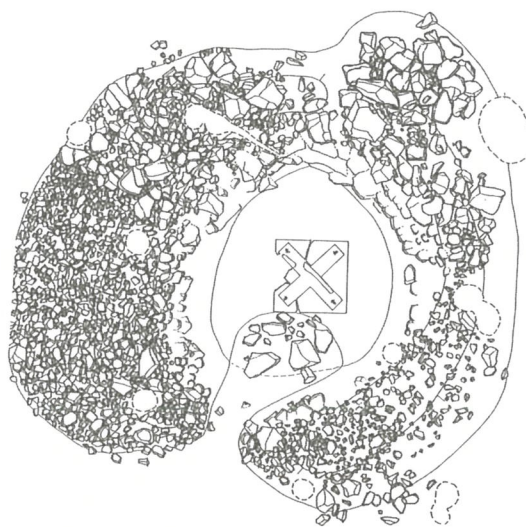
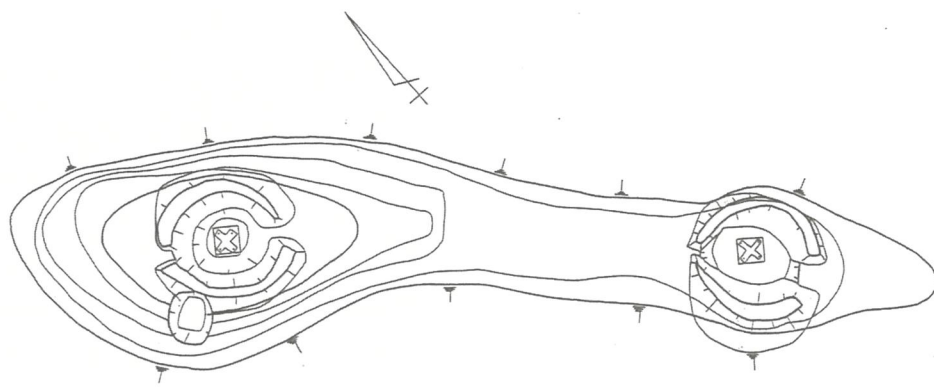
写真7 2号遺構 (南より)

防空監視哨 聴音壕 (第6図)

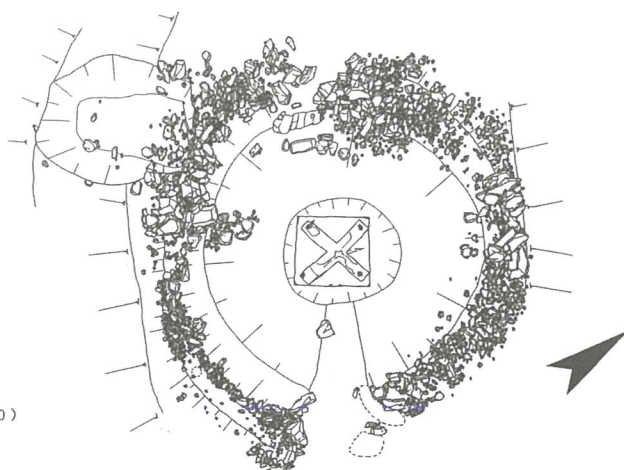
志摩西貝塚竹ノ越山の山頂 (標高163m) に設置された聴音壕で、平成22年2月、糸島魅力みつけ隊 (代表: 森 勝義氏) の歴史文化グループの踏査によって確認された。

防空監視哨は海岸線や山岳地帯に設けられた監視施設である。糸島地区においては昭和9年 (1934) 6月7日付けの『糸島新聞』に、前原と宮ノ浦の2カ所に永久監視哨を置く事が北地区地方委員会において決定されたと報道されており、最終的には昭和13年 (1938) 頃に竹ノ越山に設置されたものと考えられる。その後、昭和18年 (1943)、太平洋戦争の激化に伴い、玄界基地の対空防備施設として爆撃機などの音響監視をするため、聴音壕が同地に掘られたとされる。

今回、確認された聴音壕と考えられる遺構は、コークスレンガとセメントレンガの破片が散乱する窪地である。発掘を行っていないため、全



1号銃座
(1/50)

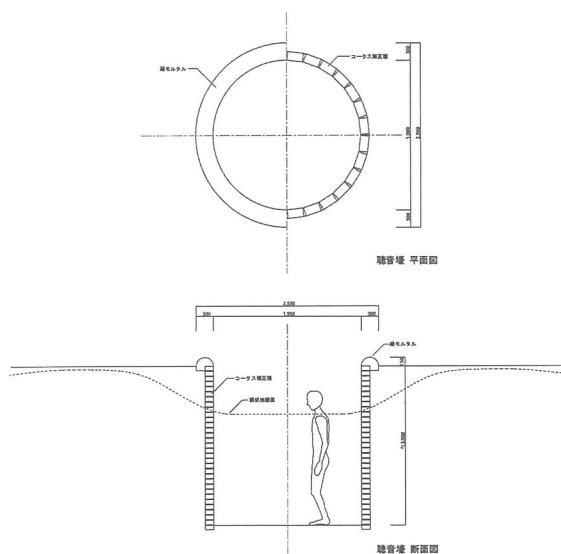


2号銃座(1/50)

第5図

様は不明であるが、窪地の直径が約3.5mを測るため、聴音壕自体の規模は直径3.0m、深さ2.0m程に復元されている。(第6図)

聴音壕 推定復元図



第6図 図聴音壕復元図

3) 松末基地

レール (図版3)

糸島市二丈松末の海岸部、通称、「竈門ノ浜」に立地する。確認された2本のレールは鉄製で、海岸から海中へと続く。現状で西側のものが約6m、東側のものが約10mを測る。

前記、GHQ提出資料にも同地に巻上げ式装置が記されており、これに当たるものと考えられる。その他、松末基地として烹炊場や兵舎の記載もされており、発見される可能性は高い。



写真8 訓練生 (二丈浜窪・箱島にて)



写真9 訓練生 (松末竈門ノ浜にて)

IV 遺品

企画展「大戦の記憶」において展示したものであるが、同展終了後にも新たな資料発見があったため、本項で紹介したい。

1) 仲西純市氏所有品

①エンジンカウリング (図版3-①)

零式水上偵察機のエンジンカウリングと考えられる。形状は長方形を成し、緩やかなアールがつく鉄板である。70cm×95cm、厚さ3mmを測る。

同機のエンジンには三菱金星43型の空冷式複列星型エンジン (14気筒) が採用されており、カウリングは金属板3枚を鉄鉚留めする形で、エンジン部分を覆う。

裏面に覚え書として「零式戦闘機、エンジンカバーです 8月末 船越基 仲西純市書 満68才」と記されている。仲西氏によると、貴重な金属資源として基地解体作業の対価として手に入れた品と言われる。

(志摩歴史資料館寄託品)

②短艇羅針儀 (図版3-②)

飛行方位を測定するための携帯用の羅針儀である。昭和二〇年夏 (七月か?)、物資輸送中に鷺の首沖近海にて墜落した水上機に搭載されていたものであり、仲西氏が海中より引き上げ、保管されていた。

資料は「零式短艇羅針儀二型」と呼ばれるもので、本品はその改造型である改二とされるものである。全面に「短艇羅針儀改二 製造年月日 昭和19年5月 製造番号 1856 重量 6

庭 佐世保海軍工廠造兵部」と刻まれたプレートが付けられる。底面19.2cm×18.8cm、高さ28.2cmを測る。

(志摩歴史資料館寄託品)

③鉄釜 (図版3-③)

烹炊場にて使用されていた大釜であり、仲西氏が2基を所有されている。

上面で直径72.5cm、高さ26.6cm、内面で深さ26.0cmを測る。

(志摩歴史資料館寄託品)

④枕木 (図版3-④)

陸揚用レールの下に敷かれた横木で、レールが砂浜に沈み込まないように据えられていたものであろう。

長さ260cm、幅19cm、厚さ4cmの横木で、両サイドに2～3個の孔を穿つ。また、「茅ヶ崎製作所」(戦時中、神奈川県茅ヶ崎にあった軍需工場) 銘の墨書きが認められるものもある。

終戦後、玄界基地は閉鎖され、兵士たちがいなくなった基地の解体作業にはGHQの命令により、地元住民がこれにあたつたとされる。また、その際、賃金の支給はされず、対価として枕木や鉄素材として水上機の部品などが現物支給されたと言われる。

現在でも20本ほどの枕木を仲西純市氏が保管されている。(一部を志摩歴史資料館に寄託)

2) 中田健吉氏収集品

①補用品箱 (図版4-①)

日立製作所が製造した木製の用品箱で、59.7cm×23.4cm、高さ23.7cm(脚部2.3cm)を測る。

蓋は可動式となり、中箱が付属している。外側正面に「〇〇用 航空機用発動発電機試験用 一、二KW電動直流発電機補用品 製造年月日 昭和十八年二月 製造所 日立製作所 製造番号 第二七一三二〇九號 収納品 発電子」と墨書きされている。

②補用品箱 (図版4-②)

①と同型品である。59.8cm×23.2cm、高さ26.5cm(脚部2.8cm)を測る。

外側正面に「〇〇用 航空機用発動発電機試験用 一、二KW電動直流発電機補用品

製造年月日 昭和十八年二月 製造所 日立製作所 製造番号 第二七一三二一三號 収納品 〇〇子」と墨書きされている。

④木札 (図版4-④)

縦14.5cm×横7.5cm、厚さ2.0cmを測る木札であり、上位に釘穴が認められる。表裏とも墨書きにより「T三〇二通信科」と記載される。

⑤鉄カブト (図版4-⑤)

志摩船越の仲西倉助氏宅の倉庫より発見されたもので、同所が指令部の寄宿所となっていたことから基地関係の遺品と考えられる。27.0cm×25.0cm、高さ14.3cmを測る。

⑥食缶〔大〕 (図版5-⑥)

烹炊場より兵舎へ食事を運ぶための食管である。現状では欠落しているが、可動式の握手が付くものである。外寸で30.0cm×22.0cm、高さ19.5cmを測る。アルマイト製。本品は鎌田恒夫氏宅より発見されたもので、玄界基地との関連は不明である。

⑦食缶〔小〕 (図版5-⑦)

⑤と同型品であるが、一回り小ぶりのタイプとなる。外寸で26.0cm×18.0cm、高さ17.0cmを測る。アルマイト製。

側面より可動式の握手が付く。

⑧食缶〔小〕 (図版5-⑧)

⑥と同形品。外寸で26.5cm×18.5cm、高さ17.0cmを測る。アルマイト製。

⑨ヤカン (図版5-⑨)

中央部に日本海軍の印が刻まれる。底面直径18.9cm、高さ20.3cmを測る。

3) 引津保育園所有品

同園は法正寺が経営されており、格納庫の跡地に建てられている。また、法正寺西側に飛行隊指揮所があつたことから同園に遺品が保管されていたのであろう。

①電信受 (図版5-①)

木製の電信受で、2段(上段〔發信〕下段〔受信])の入れ口を付ける。

裏面に「昭和二十年 七月二十八日起 偵三〇二飛行隊 甲板係」と墨書きされており、指揮所で使用されていたものと考えられる。

高さ43.3cm、幅10.9cmを測る。

②長机 (図版5-②)

木製の長机であり。255.0cm×69.5cmの天板に4脚が付き、高さは73.0cmを測る。天板下の側面に「T三〇二水偵隊」の銘が墨書きされる。当時の用語ではT＝偵察隊であり、後に編入された三〇二飛行隊で使用されていたものである。

4) その他

①碇 (図版1)

引津保育園南側広場に整備された「玄界基地跡」に展示されている碇であり、水上のフロートを固定するために使用されていたものである。最大幅85cm、高さ120cmを測る。

V おわりに

玄界基地より沖縄周辺の敵艦船夜間攻撃へと出撃した六三四空瑞雲隊は、延べ111機と記録されている。他の基地へ帰還された方々もいるであろうが、玄海基地の記録上では、未帰還が20機と記されており、40名程の尊い命が失われたこととなる。また、戦死者の中には若い世代や小さい子供を持つ父親も多かったと言われる。

こうした我が国が歩んだ悲慘な歴史を二度と繰

り返さないためにも、糸島の地にあった「海軍航空隊 玄界基地」の記録を後世に残すことは今を生きる私たちの責務であり、本稿がその一助となれば幸甚である。

最後になるが、昭和二十年一月、玄界基地を飛び立ち、南西諸島にてその尊い命を無くされた山岸正三少尉（新潟県）の辞世の句を紹介し、本稿の終りとしたい。

大空の雲と消ゆとも 悔ゆるなし

遺志を伝へむ 愛児ありとせば

参考文献

- 1) 『新修 志摩町誌』
- 2) 『二丈町誌—平成版—』
- 3) 『瑞雲飛翔 梶山瑞雲』
- 4) 『第634海軍航空隊小史』
- 5) 中田健吉氏のご教授による。
- 6) 仲西純市氏のご教授による。
- 7) 松尾治部氏のご教授による。
- 8) 引津保育所大蔵園長のご教授による。
- 9) 玄界基地平和記念祭
- 10) 小富士海軍航空隊飛行場建設物語
- 11) 第63回海軍航空隊小史

本稿の執筆にあたり、多くの御教示と資料の提供を受けた中田健吉氏、仲西純市氏、松尾治部氏、引津保育園大蔵浩子園長に感謝申し上げたい。



写真10 搭乗員（法正寺境内にて）



船越基地烹炊場跡



竈近景



食糧貯蔵庫近景



船越基地碇

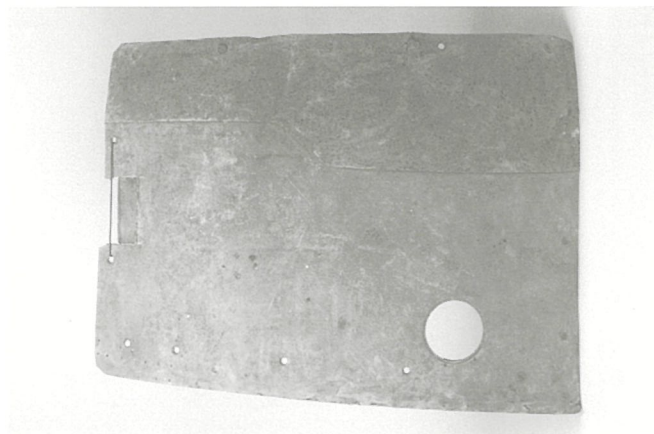


食糧貯蔵庫内部

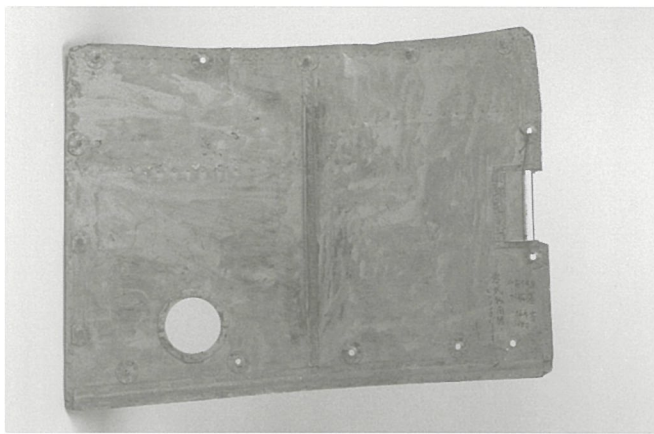


(上) 松末基地陸揚レール全景

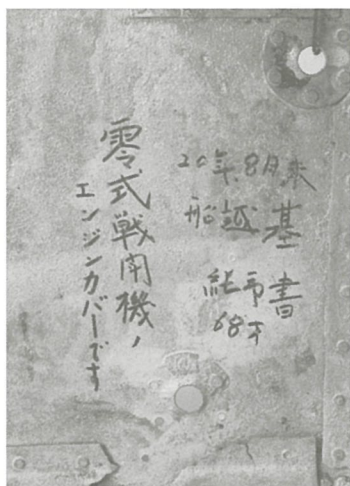
(下) レール近景



①エンジンカバー (表)



①エンジンカバー (裏)



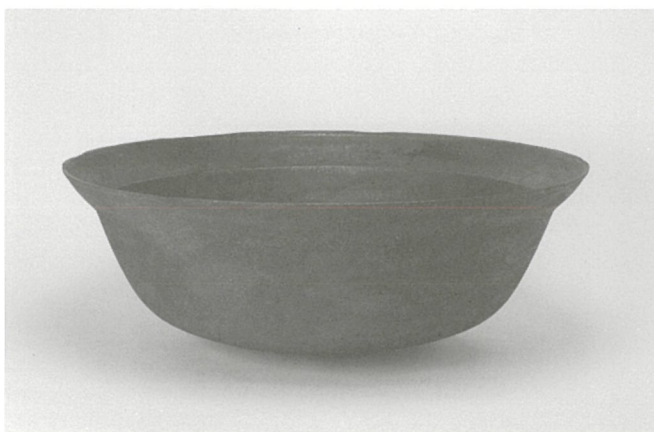
①エンジンカバー (覚え書)



②短艇羅針儀 (正面)



②短艇羅針儀 (左側面)



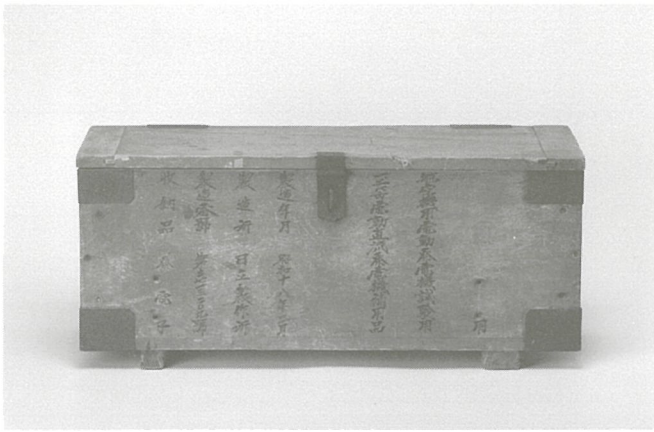
③鉄 釜



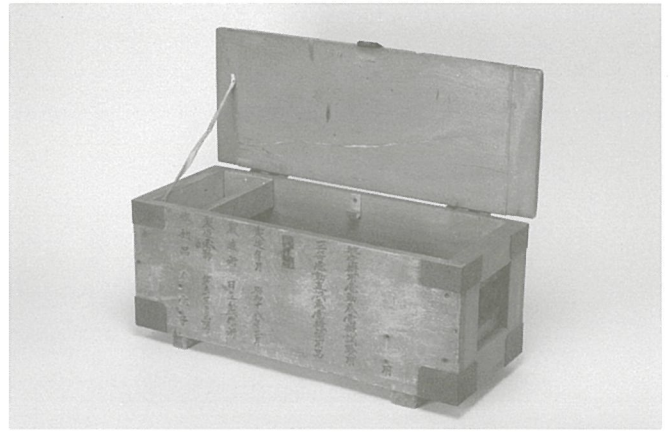
④枕 木



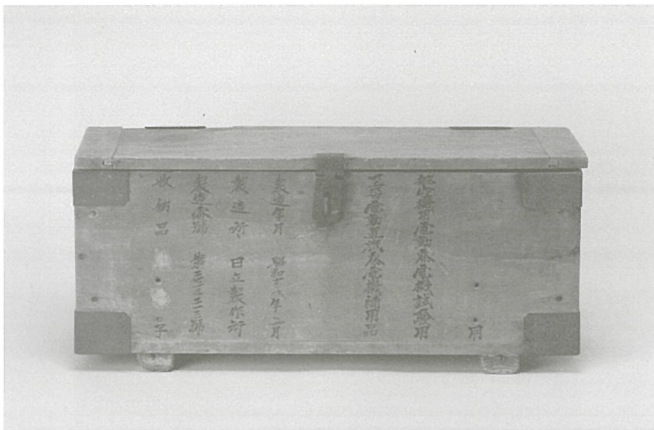
④枕木墨書き



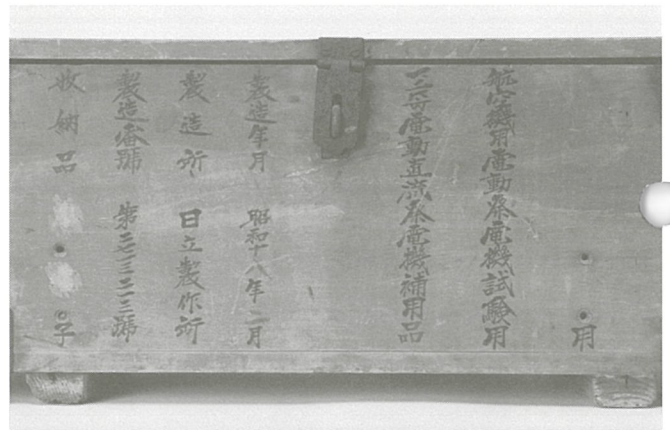
①補用品箱



同左



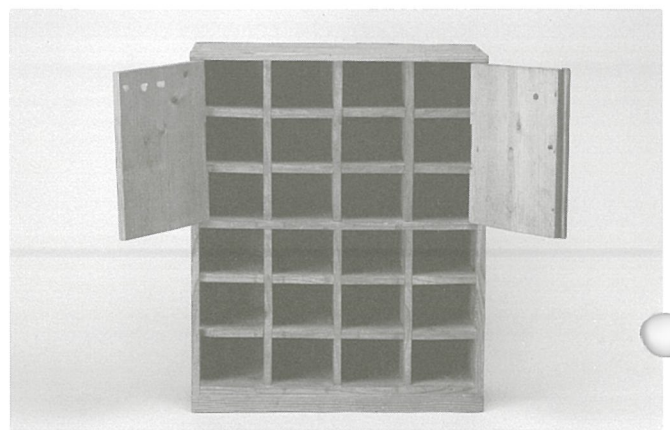
①補用品箱



同左 墨書



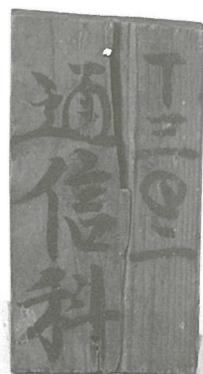
③電報入れ



同左



④木札



同左 裏面



⑤鉄カブト



⑥食缶



⑦食缶



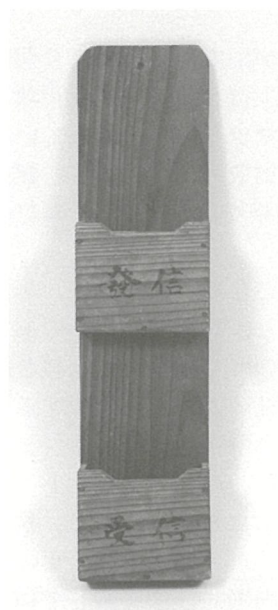
⑧食缶



⑨ヤカン



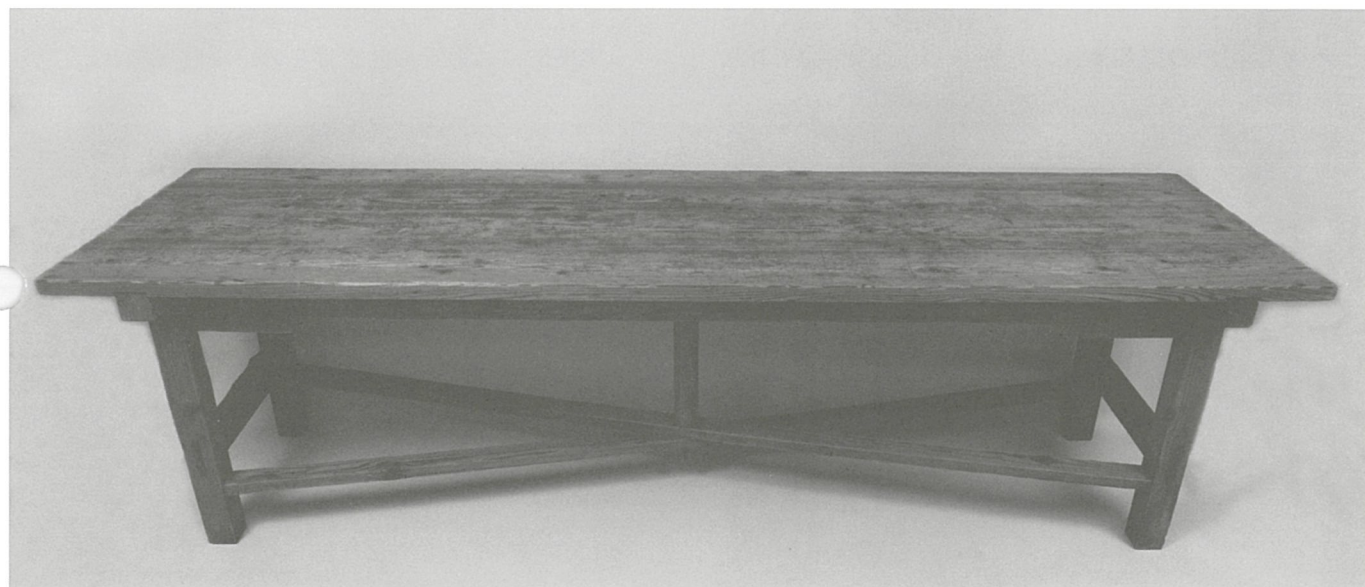
同左刻印



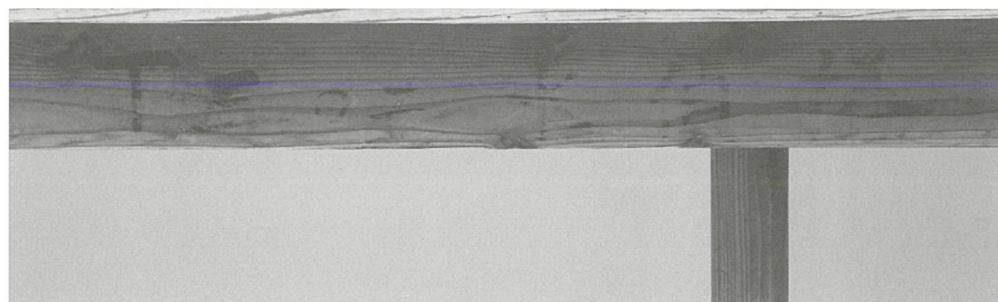
①電信受



同左 裏面



②長机



同上 墨書